

令和2年度 達成状況 及び
令和3年度 教育(年度)目標

東筑紫短期大学

目 次

建学の精神と教育理念		1 頁
美容ファッションビジネス学科	達成状況	2
保 育 学 科	達成状況	5
	教育目標	8
食 物 栄 養 学 科	達成状況	11
	教育目標	15
専 攻 科	達成状況	18
	教育目標	21
学 生 部	達成状況	23
	年度目標	28
教 務 部	達成状況	31
	年度目標	33
事 務 部	達成状況	34
	年度目標	35

建学の精神と教育理念

昭和 11 年筑紫洋裁女学院が設立され、その後、幼稚園、中学校、高等学校、東筑紫短期大学、九州栄養福祉大学そして同大学院、九州リハビリテーション大学校と本学園は総合学園化してきて今日に至っている。この 70 数年間の道のりのなかで一貫してそれぞれの学校教育の精神的基盤になってきたのが「筑紫魂」という建学の精神である。現在は以下に記す「筑紫の心」となって簡略化されているが本学の教育理念の基盤として根底に流れているのである。創設者・宇城信五郎の起草したものである。

「教育とは心の畑を耕すことであります。ともすれば草を生い茂らせ狭隘にして痩せ細りがちな心の畑の草をむしり肥料をつちかい新生する芽を伸ばしていくところに教育の使命があります。

東筑紫学園の建学の精神は教職員学生生徒が心をひとつにして勇気、親和、愛、知性の四つの芽を心の畑に種蒔き育てていくことにあります。

筑紫の心は国を愛し労働をいとわず親や祖先をあがめ己れをむなしくして社会に奉仕する人間像を理想にしています。」

そもそも建学の精神とは、主に私立大学（学校）などが創設されるときに、その大学の創設者がかけがえのない独自性をもった理想的な教育思想・理念のことで建学の思想ともよばれる。主として、その大学の設置理念、教育内容の特徴、養成する人材の必要性、重要性及びその大学の社会に対する貢献内容などが表現されている。

本短期大学は被服科の短大から始まった。社会に役立つ実学としての和裁・洋裁とそれを根っこで支えるこの「筑紫の心」が不可分一体を目指して本学の教育がなされてきたのである。本学の生活実学教育課程はそういう意味で二つの構造的性格を持っている。つまり衣、食、住、子育て、介護という各学科の専門の知識、技術を修得探求させるということと、筑紫の心にある四つの徳目を育てながらやがてそれらを調和させ己をむなしくして社会に奉仕できる人間に成長させるという二つの教育的要請である。ここに本学の「生活者実学」の特徴がある。換言するなら現実社会で役に立つ専門的力とどんな困難な状況にぶつかっても生き抜いてゆく「^{まった}全き生命力」を養成するということである。

特にその生命力の養成における基本は、勇気・親和・愛・知性を力強く成長させ一つの人格の中で調和統一し真澄（ますみ）の天空のような心を創りあげることである。そのなにもものにも汚されない泰然自若の真澄の心が実存する時はじめて筑紫魂が発動するのである。この場合の筑紫魂とは言うまでもなく筑紫という地名から発する宇宙魂を指しているのである。我々は己を空しくしてこの我々を創造して下された宇宙創造の根源的に触れ合うことによるのみ社会に奉仕できる最高レベルの生命力を発現できるのである。

このように生活実学教育理念を支えるものの根本として本学の建学の精神が存在している。

令和2年度 教育目標の達成状況

— 美容ファッションビジネス学科 —

(1) 学生支援

知識・技術の修得に加え思考力・判断力・表現力等の能力や、主体的に学習に取り組む態度の育成を目標とし、アクティブラーニングを積極的に取り入れた「学習支援」を考え、卒業後、社会生活する上での多岐にわたる「人間力」を培うことを主軸とし、学生への様々なアプローチを実施するよう心掛けた。しかし、今年度は「新型コロナウイルス」感染拡大防止対策として、授業計画の大幅変更がなされ、それに伴う「オンライン授業」の導入・キャンパスへの入室制限など、「実習」「演習」という「実学」を旨とする美容ファッションビジネス学科においては、あらゆる方向で苦慮する1年となった。

① 基礎学力向上のための学習支援体制

今年度も授業改善に向けた組織的取り組みの継続として、学生の「基礎学力の向上」に主眼を置いた学習支援体制を実施した。

前年度実施して効果があった方法（基礎学力の向上とあわせ、教科内容の理解力の向上や、検定合格）を、教科教育内、検定へ向けての特別講座、オフィスアワー等、限られた範囲内であったが、今年度もオンライン含め、多方面からのアプローチにより、基礎的などころから個別指導を実施した。対面授業と比較した場合、そこまでの満足感や達成感は得られなかったかもしれないが、その時点で出来ることすべて考え実践した。このことにより、学生の（予測のたたない）不安感やジレンマのようなものは、いくらか軽減されたのではないかと感じる。

② 教育内容の充実

オンライン含め授業を行っていく中、様々な制限もあったが、アクティブ・ラーニング形式を導入した授業を実施することができた。対話的な授業を実施し、到達目標を明確にさせ、検定取得（上位級）を目指すような対策や補習を組むこともできた。また、理解度をはかるため、対話だけでなくレポートの提出も試みた。

地域社会含め、外部の人的・物的資源を活用する（授業に取り入れる）ことが困難な1年であった。その中でも、安全対策を講じ、可能な限り（外部も含め）活動を実施した。本学科の特色ある教育内容を活用した活動は、学生の学習意欲や意識の向上につながったと思われる。

③ 社会人になるための能力の養成

本学の特色ある実務教育の過程で身につく、挨拶・礼儀・言葉遣い・身だしなみなどのマナー教育を始めとし、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上、生活者として必要な一般常識の体得、社会人としての視点から必要なスキルやキャリアアップ、特に人格教育、付加価値の高い人材育成という観点において、大きな目標を掲げていた。

しかし、今年度は授業内容の大幅変更、オンライン教育範囲内での様々な制限により、社会人として必要な基礎的知識や、生活人として不可欠な要素を身に付けさせることを目的とした、細部までの指導がいきわたらなかったと反省する。

特に、専門分野のスペシャリストを特別講義の形式で招聘したいと考えていたが、コロナを中心とした諸事情により叶わなかった。

④ 行事教育

建学の精神「筑紫の心」に基づき、これまで通り「行事教育」にも重点を置き、人として生きていく力や、卒業後は社会人として、美容・ファッション・ビジネスの専門分野で活躍できる人材の育成を目標とし、コロナ対策を整え、可能な限り学科行事を実施した。

実施するにあたり、これまで通り事前教育を徹底した。このことにより、学生は意義や内容を理解することができたと考える。

一例として、今年度は「大学祭」が中止となり、「フォールフェス」へと変更されたが、本学科は学科行事として「ファッション&ヘアメイクショー」を無観客で撮影、期間限定で配信した。このことにより、委縮気味だった学生のモチベーションが好転し、残された学生生活への意欲が復活したようである。

(2) 就職活動支援教育の充実

① 就職支援のための講座

今年度も、就職支援において、学科（クラス担任やコースの専門教科担当者）と就職指導課とが密に連携を取りながら、学科教員で学生個々へ向け、昨年度より更に深い指導（個別相談対応を中心に）を実施したいと考えた。しかし残念ながら、コロナ対策の関係で、就職支援を最も必要とする時期に対面での指導がかなわず、オンラインでの指導となった。

就職指導課も（オンライン指導含め）様々なアプローチを実施された。

今年度は、企業面接も「オンライン面接」が主流となり、学生へは面接指導だけでなく、通信機器のサポート体制も整えた。

残念ながら、外部講師の招聘は実施できなかった。

② コース・教科等、専門性に沿った社会体験

インターンシップ制は、参加する学生にとって「働くとは何かを実感する、実際の職種・仕事内容を知る、仕事に対する適正を知る」ことができる、大変有意義なプログラムであると考えられる。しかし、残念ながら、今年度は実施できなかった。

そのような環境の中で、学生は積極的に就職活動に取り組み、FB コースは 84%、美容師コースは 100%の学生が（3月22日現在）就職内定となっている。

(3) 地域社会への貢献活動

学科の特色ある教科内容を活用し、これまで多岐にわたり実施した地域貢献活動において、参加した学生は、教科教育だけでなく、人格教育においても大きく前進することができたように感じる。

今年度も（コロナ対策・安全第一を考えながら）、本学科の特色ある教育内容を活用し、学内・学外多方面からのご指導・ご支援・ご協力を仰ぎながら、学科最後の機会として、本学科だからこそ可能な貢献活動を積極的に展開した。

① ショーを中心とした地域貢献活動

今年度も、地域社会や団体の要請を受け、地域活性化を主軸とした目標に向け、地域貢献活動に取り組んだ。

【活動報告】

- ◆「ハロウィンコスチューム、デコレーション」展示
令和2年10月17日（土）～10月29日（木）
北九州モノレール 平和通駅
北九州モノレールからの要請
- ◆「東筑紫学園高校スクールフェスティバル プロモーションビデオ制作」
令和2年10月31日（土） 東筑紫学園高校
学園高校 服飾類型生徒が自作したドレスを着用しビデオ撮影
美ファビ学科 美容師コース2年生がヘアメイク、フィッティングを協力
- ◆「年末の交通安全県民運動 特別イベント 反射材ファッションショー」
令和2年12月11日（金） 小倉駅 JAM 広場
福岡県警小倉北署、小倉北区役所からの要請
- ◆「クリスマスコスチューム、デコレーション」展示
令和2年10月15日（火）～12月25日（金）
北九州モノレール 平和通駅
北九州モノレールからの要請
- ◆「反射材ファッションショー『感謝状贈呈式』出席」
令和2年12月23日（水）14：00 福岡県警小倉北署
15：30 小倉北区役所

② チャリティ募金

美容専門教科の特別実習としての位置づけで展開を試みた、美容師コース学生による学内サロン「salon de CHIKUSHI」は、単に知識や技術の向上だけでなく、接客に携わる職種として不可欠なコミュニケーション能力や、職業人として何を求められているのかを察知する力や、チャリティ募金による社会貢献への展開など、人格教育の面からも、教科教育の枠を超えた大きな一歩となる。

しかし、残念ながら（コロナの関係で）今年度はサロンを実施することができなかった。

なお、チャリティ募金は2018年度（前期7,800円・後期6,000円）、2019年度（前期4,500円・後期6,600円）の計4回分をまとめて、JHD&C（特定非営利活動法人 JAPAN HAIR DONATION & CHARITY）へ募金させていただいた。

③ 学生ボランティア

今年度、学生ボランティアとしての外部活動は、様々な制約により実施できなかった。その中で、「東筑紫学園高校 スクールフェスティバル プロモーションビデオ制作」においてヘアメイク・フィッティングを担当・協力させていただいた。

今年度、学科のオープンキャンパスは実施がなかったため、高校生との交流はこれが唯一の機会であった。参加した美容師コースの学生全員は、日頃の学習成果をご覧いただくことができ、またこのイベントに関わられたすべての方からお褒めのことばをいただき、国家試験へ向けての意識の向上につながったと感じる。

以上

令和2年度 教育目標の達成状況

－ 保育学科 －

『筑紫の心』をもち、豊かな人間性と確かな専門性を兼ね備え、社会に貢献できる実践力のある保育者を養成する。

1 建学の精神『筑紫の心』を踏まえ、3つのポリシーに沿った教育の実施

- ・「アドミッション・ポリシー」、「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」をキャリア教育、各教科にて学生が再確認できるようにした。しかし、コロナ禍のため例年行っている地域に出向いてのインターンシップを活用することはできなかった。
- ・保育学科のシラバスを見直し、保育者としての資質向上を図るためにカリキュラムの検討を計画したが、実施できなかった。
本学科教職員はじめ非常勤講師と共に本学の建学の精神である『筑紫の心』を基盤に、学生の個々の特性を認め、専門性豊かな保育者を目指す指導を行った。

2 教職員間の連携による活気ある協働体制の確立

- ・教員の新規採用者については、授業を二人体制で実施した。
- ・学級経営や学生指導の仕方を学年会議、学科会議にて毎週1回話し合う機会をもった。
- ・授業で取り組んでいること、教育内容、提出期日等を記載した提示箇所を2か所（①2号館掲示フロアー ②学生が講義室移動の際、見やすい通路：1号館3階310研究室横）に増やし、学生と担任がより把握できるようにした。
- ・基本的なマナーに欠けている学生が近年増えていると、実習先にて指摘されることが多くなっている。学生が基本的なマナーを身に付けられるよう、キャリア教育演習においてマナーに関する講義を取り入れた。また、日常的に全教職員が指導を行った。
- ・オンライン授業に関して、短い期間にスムーズに授業が展開できるように教職員が一丸となって取り組んだ。
- ・保育学科の業務担当組織の見直しを図った。

3 主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現のための授業改善

○本学科における授業研究の取組

- ・アクティブ・ラーニングによる授業の充実を図る。
学生が自ら課題をもち、課題を解決し、成果をまとめ表現する授業を実施した。
「キャリア教育演習Ⅰ・Ⅱ」を連動し、保育技術を中心にキャリアアップ演習を行い、2年次では学生自身が課題を見つけて、その課題を自分の力で解決する授業を展開した。
内容の一つに2年次のキャリア教育演習で「新型コロナウイルス感染拡大による風評被害などに、どう対応するか」の課題を提示し、授業を行った。
- ・コロナ禍、本校の「掃除教育」の指導ができなかった。
- ・保育・教職実践演習は、2年次前期に他の授業科目を通して身に付けてきた知識、技能を確認、自己評価し、2年次後期に不足している授業内容を補完、向上させる授業展開をした。教育や保

育の現場で保育者としての使命感、責任感、教育的愛情などを身に付けていくことが目標であり、学生の卒業後の進路と授業が繋がる内容とした。

- ・情報教育をどの授業でも積極的に取り入れる為に、就職指導課・3号館医療秘書演習室の利用を依頼し、授業を行った。
- ・1年次、最初の保育所実習で評価の低かった学生に関して、面談を行い、次回の実習に向けての細やかな助言を加え援助した結果、2回目の実習では成果が出た。
- ・「こども音楽療育実習」後、最終授業において、実習報告会を行った。今年度は、授業の関係で多くの教員の参加はできなかった。しかし、1年次の学生に対して、キャリア教育演習にて、2年次のこども音楽療育実習の報告を行った。

4 認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園、東筑紫学園高校等との連携、地域社会との交流及び社会貢献

- ・1年生の認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園へ見学実習は、コロナ禍のため、例年より回数を減らし行った。その後の保育所実習において、1年生であるが子どもとのかかわりがよいとの高評価を受けた学生が多かった。
- ・保育学科で作成したインターンシップ登録証「筑紫の心」手帳を活用しての地域社会との交流及び社会貢献ボランティアは、今年度コロナ禍のため実施できなかった。
- ・東筑紫学園高校からの新入学生に関して、高校担任との情報交換会により、一人一人の学生の家庭環境、教育環境などを把握した、クラス編成を行った。
- ・地域社会の交流及び学外活動、教員免許状更新講習、子育て支援を開催することは、実施できなかった。

5 在校生や卒業生への適切な支援の充実と休学者や退学者の削減へ向けての対策

- ・本学科では、今年度も「心の悩み110番」手帳を見直し、下記のように学生が相談しやすい環境を整えた。

①学生の相談に応じやすいオフィスアワーの掲示を各教員の研究室前にする。

②研究室のドアを開放し、学生が相談に来やすいようにする。

③廊下ですれ違う時暗い顔の学生に声掛けをする。

結果、昨年より相談件数は増加した。コロナ禍の影響もあり、悩みを抱える学生が多かった。クラス担任は今まで以上に学生の把握や家庭との連携に努め、早期に問題解決ができるように気配りを行った。

- ・オンライン授業開始時に受講できない1年生が少数いたので、個人指導を行った。対面授業開始時には、教職員の持ち味を活かした温かな信頼関係の中で学生の支援活動を学生指導課、看護師、カウンセラーと連携を取りながら、極め細かい学生指導を行えるようになった。
- ・就職活動支援の充実を図った。幼稚園、保育所、施設の情報を在校生へ提供し、就職活動の手がかりとした。学生部（就職指導課）等と連携し、実態把握をして取り組みを強化した。
- ・本学科内の職務分担を見直し、教職員の協力体制を強化すると共に、クラス担任は学生指導課、教務課、会計課等と日常的に情報交換を行い、学生の成績や授業料未納者等の把握に努め、それに応じた適切な対応をした。また、学年会議、学科会議（FD会議）における情報交換にて、学生の動向について確認し、学生の指導に生かした。

- ・新採用の実習担当者、副手が加わったので、今まで以上に情報交換を行い、幼稚園、保育所、施設実習が円滑に行えるように学生支援体制をつくった。
- ・非常勤講師との連携をとり、4月に非常勤講師、および教職員の紹介写真を配布した。教職員から積極的な声掛けを行うようにした。学生の出席状況、授業態度などに関して定期的に情報交換を図れた。学年会議、学科会議（FD会議）で情報を共有し、問題に応じて対処法を検討し、学生指導に活かした。
- ・今年度は卒業後、大学に来校することが難しく、電話にて精神的な支えになるよう援助、支援を行った。

6 学生の定員確保への取組

- ・出前授業や学校訪問の要請が少なく、東筑紫学園の『建学の精神』を踏まえての「保育学科の教育目標」「資格取得内容」等の説明や、詳しい授業内容説明等を行えなかった。オープンキャンパスが行えなかったため、12月に学生募集のため、保育学科教員が2名ずつ高校訪問をした。しかし、その時期では、進路を決めている高校生が多かった。
- ・東筑紫学園高等学校の先生の補助の元、リモートガイダンスを行った。結果、本学科についての理解を得ることができ入学者が多かった。
- ・オープンキャンパス中止のため、学校見学会を全教職員、認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園との連携で取り組んだ。その結果、学校見学会に参加した学生のほとんどが令和3年度入学した。
- ・オープンキャンパスや高校訪問の際、例年行っている出身高校への写真レター「母校へのメッセージ」は写真撮影が密になるため出来ず、活用できなかった。

以上

令和3年度 教育目標

－ 保育学科 －

「筑紫の心」をもち、豊かな人間性と確かな専門性を兼ね備え、社会に貢献できる実践力のある保育者を養成する。

1 建学の精神「筑紫の心」を踏まえ、3つのポリシーに沿った教育の実施

- ・アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを各授業で取り入れ学生が再確認できるように検討をする。
- ・保育学科のシラバスを見直し、編成したシラバスに基づいて実践を行いながら、保育者として資質向上を図るため、本学科教職員をはじめ非常勤講師と共に本学の建学の精神である「筑紫の心」を基盤に、学生一人一人に応じた指導を行う。

カリキュラムは 教職課程認定基準変更に伴い、変更を行った。令和2年2月に保育学科独自でカリキュラム検討委員会を発足し、より学習の効率化を図り、授業展開をするようにカリキュラム・シラバスの再検討を行ってきた。令和3年7月までには文科省に提出できるようにする。

2 主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現のための授業改善

- ・平成30年度から、新幼稚園教育要領、新保育所保育指針、新幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づいた保育が実施されている。その趣旨を十分に理解し、授業の中に活かしていくようにする。また、令和3年度もコロナ禍、必要に応じてオンライン授業を取り入れる。
- ・本学科における授業研究の取組

＜キャリア教育演習Ⅰ・Ⅱと保育・教職実践演習の内容の検討について＞

キャリア教育Ⅰ・Ⅱを連動し、1年次においては、実習指導や学生生活の心構えなどのカリキュラムを通して、基本的なマナーが身に付けられるように指導する。また救命救急講習や性感染症及び情報化の問題についての講義を行う。2年次では学生自身が課題を自ら見つけて、その課題を自分の力で解決するアクティブ・ラーニング形式にて演習を展開する。

- ・保育・教職実践演習は2年前期に自己評価をし、2年後期に授業展開する。他の授業科目を通して身に付けてきた知識・技能を確認し、不足している授業内容を補完・向上させる。

教育や保育の現場で保育者としての使命感、責任感、教育的愛情などを身に付けていくことが目標であり、学生の卒業後の進路と授業が繋がる内容としていく。特に学生にとってこの保育・教職実践演習は最終的なまとめの授業であり、これまでに修得してきたことを再確認する。

- ・1年次の1回目の保育所実習で評価の低かった学生に関して、面談を行い、次回の実習に向けての細やかな助言を加え支援する。

3 教員間による連携と共同体制の推進

- ・本学科では、学外実習が6回実施される。これまで実習担当教員と副手による実習への準備がなされてきた。新たに、助手1名が加わり仕事分担を明確にする。
- ・実習は、今年度もコロナ禍になることが予想される。実習不可能時の、対策を考えておく。(各施設に従事している方の講話など)

実習先に提出する行動観察記録の確認は、実習事前指導の際に、実習担当者のみでなく、実習先訪問者も確認、不備がないか再点検する。

- ・コロナ禍、学生の密を回避するために、①授業展開を通常の対面授業 ②通常の対面授業のライブ映像配信授業 ③全受講生が自宅で受講できるオンライン授業 ④録画配信を全受講生が自宅等で受講できるオンデマンド授業、の4パターンを必要に応じて行う。

昨年度は、オンライン授業を5月より開始した。最初は授業に参加できず戸惑った学生がかなりいたが、クラス担任が細やかな個人指導を行うことにより、視聴できるようになった。今年度はオリエンテーションより指導援助を行う。

- ・非常勤講師との連携

非常勤の先生方と教職員の連携を図る。教務課の協力の元、学科教職員及び非常勤の先生方の写真を共有することにより積極的に声掛けができ、連携が取れるようにする。学生の授業の様子などの情報共有も図る。

非常勤講師に対して、学生の欠席状況、授業態度などに関しては早めの報告を依頼する。教員は、教務課より学生の欠席状況に関しての報告を受け、対応する。そして、学科会議（FD会議）で情報を共有し、問題に応じて対処法を検討し、学生指導に活かす。教員は非常勤講師とコミュニケーションをとる。

- ・こども音楽療育実習

こども音楽療育実習後の授業において、保育学科教員も、今後の教員訪問時の指導の参考にするため実習報告会に参加する。また、学生においても1年生のキャリア教育にて、2年生のこども音楽療育演習の実習報告を見学する。そして、次年度（2年生）の実習時の不安解消に繋げる。

- ・基本的なマナーが欠けている学生が近年増えている現状が指摘される。学生が基本的なマナーを身に付けられるよう、日常的に全教員が指導を行っていく。

4 在校生や卒業生への適切な支援の充実と休学者や退学者の削減へ向けての対策

- ・今年度までと同様に来年度の本学科への入学予定者に関して、東筑紫学園高校と連絡を取り、高校時代の学生の心身の健康状態、友人関係などの実態を把握する。入学後、学生の長所を伸ばし、充実した学生生活を送ることができるよう学生支援に活用する。
- ・本学科では、「心の悩み110番」手帳を見直し、学生の相談に応じやすい環境を整える。また、担任を中心に学生指導課、看護師、カウンセラーと連携を取りながら、きめ細かい学生指導を行っていく。
- ・就職活動支援の充実を図る。クラス担任と学生部（就職指導課）等と連携し、幼稚園、保育所、施設の情報の実態把握を行う。在校生へ情報を提供し、就職活動の手がかりとする。
- ・本学科内の職務分担を見直し、教職員の協力体制を強化すると共に、クラス担任は学生指導課・教務課・会計課等と日常的に情報交換を行い、学生の成績や授業料未納者等の把握に努め、それに応じた適切な対応をとっていく。
- ・卒業生に対して、精神的な支えになるよう保育内容・人間関係等の相談援助や指導を行う。

5 学生の定員確保への取組

- ・高校生の人数の減少が指摘されている。保育に対する魅力、生き甲斐など高校ガイダンスの模擬授業、進路ガイダンスを積極的に行い、本学の保育学科の魅力をアピールする必要がある。今年

度、男子学生の入学が例年になく少ない。卒業後の施設における男性保育者の募集状況を、高校生へ知らせることにより男子入学生を増やす。

東筑紫短期大学の「建学の精神」を踏まえて「保育学科の教育目標」「資格取得内容」等を教員間で再確認の上、一貫性のある説明が出来るようにする。企画広報課と学科で有効な広報宣伝の方法を話し合い、協力しながら活動をする。

又、オープンキャンパスが出来ない場合、学校見学会の実施を行う。それに参加した学生の定員確保に努める。昨年12月、高校訪問を行った。今年度は時期を早めて、回数を増やし、保育学科の全教員が一丸となって学生募集を行う。

コロナの感染状況をみて可能であれば、出身高校への写真レター「母校へのメッセージ」の有効活用を行う。

6 専攻科の学生募集の検討

- ・令和3年度の専攻科進学者は4名と少なかった。例年、専攻科進学を募集するのは1年前期から行っているが、特に力を入れているのは2年卒業間際である。専攻科進学生の援助のために、専攻科教員と保育学科教員とで2ヶ月に1回会議を行い、専攻科は保育学科と共有しているという教員の意識をさらに高める。キャリア教育の授業にて専攻科の先生に講義を依頼することで、専攻科の教員と学生とが親しみを持ち、コミュニケーションを取ることで、学生募集につなげる。

7 認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園、東筑紫学園高等学校等との連携、地域社会との交流及び社会貢献

- ・認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園と密接な連携をとっていく。
- ・東筑紫学園高等学校と、出前講義を通して、本学科についての理解を得る。必要に応じてリモートガイダンスの企画も立案する。高校生に保育の楽しさや喜びを理解してもらい、保育学科に興味関心をもつことができるように努める。
- ・保育学科教員による免許状更新講習を行う。対象者は東筑紫短期大学卒業生及び他学校免許状取得該当者である。
- ・学生主体による子育て支援を地域の市民センターと連携、協働し、ボランティア活動を促進する。

以上

令和2年度 教育目標の達成状況

—食物栄養学科—

令和元年度教育目標として、『「建学の精神」に基づき、豊かな人間性を育み、栄養士の専門的知識と多様な技術を習得することで、「食」をとおして人々の健康づくりに寄与し、地域社会に貢献できる栄養士を養成する。』を掲げ、目標達成への課題解決に向けて様々な取組を行う計画であった。

しかし、令和2年度は、年度当初から新型コロナウイルス感染症拡大防止による非常事態宣言や休校措置の影響で、全ての対面での行事が中止となり、代わりにオンラインやリモートによる行事・講義形態となった。

その状況下において本学科は、学生のコロナ禍による不利益を少しでも軽減できるよう、7月初旬からできる限りの感染症防止対策を行いながら対面授業を実施してきた。

1. アドミッションポリシーに沿った学生募集の組織的な取組

学生募集については今年度の重点課題として、数値目標に定員70名を掲げ、学科教員が同じ認識をもち、共通理解を図りながら下記(1)～(5)の取組を行った。

その結果、令和3年度の入学者は79名であり、数値目標を達成することができた。また、学園高校からの入学者はもとより、学園高校以外の高校からの入学者の増加も見られた。

(1) 学園高校食物文化科との連携について

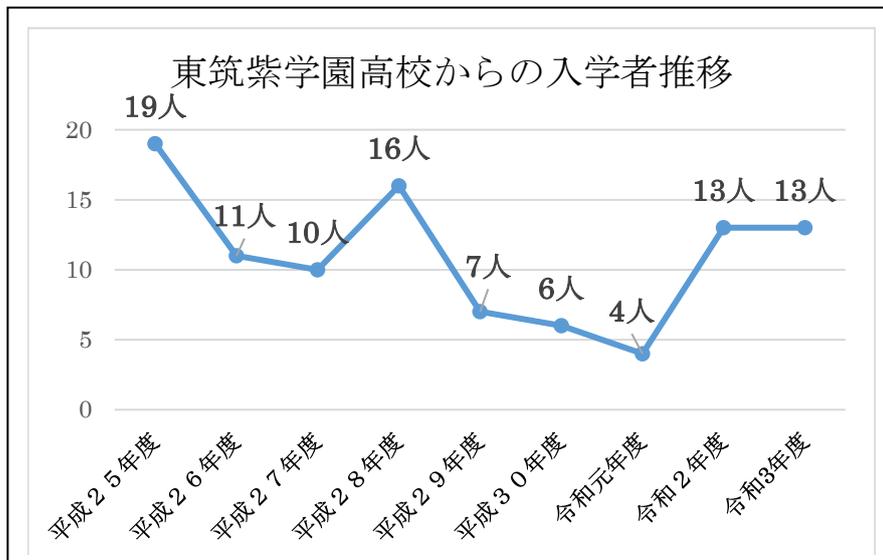
学園高校食物文化科との連携を深め、高校生が短大の食物栄養学科に興味や親しみをもつことで、短大食物栄養学科への進路希望者の掘り起こしを行い学生募集に繋げる目的で「高大連携授業」の取組を実施した。学園高校食物文化科の1・2年生を対象として、生徒が本学科に興味や親しみをもち、本学科に進学したいという気持ちを高めてもらう目的で高大連携授業を行った。今年度は、食物文化科の1年生を対象に1回実施することができた。

実施日：2月17日（水）9：30～12：00

実施内容：「顕微鏡を使ってでんぷん等を観察しよう！」

取組後のアンケート調査結果では、①実験が楽しかった(100%) ②食物栄養学科に興味を持った(100%)と、ほとんどの生徒が実験に興味関心をもって楽しく学ぶことができ、食物栄養学科にも興味を示して、有意義な取組となった。

また、学園高校との連携を強化することで、それぞれの課題や想いを共通認識することができ、入学者の増加にもつなげることができた。



(2) 出前講義・進学ガイダンスについて

進学ガイダンスや出前講義においては教務課と共通理解を図り、高校生にとって分かりやすく、本学科の特色を踏まえた内容の資料を作成し、栄養士免許取得の魅力について理解を深めてもらうことができた。

令和2年9月から令和3年3月まで、計15回の進学ガイダンスに参加することができた。

(3) 学科オープンキャンパスについて

令和2年度はWebによるオープンキャンパス及び人数限定での学校見学会を実施した。高校生は本学科の施設・設備に関心を示し、熱心な質問も出されるなどして有意義な取組となった。

(4) 男女共学に伴うカリキュラム見直しの検討

本学科は2019年度から男子学生の募集を行っており、2021年度は、1・2年合わせて5名の男子学生が在籍することとなる。そこで男女ともに栄養士免許を生かした職業につなげられるような新たな資格取得やカリキュラムの見直しについて引き続き検討を進めていく。

2. 教育支援の体制強化と学修の質の向上

(1) 基礎学力の向上

1年次では「入学前課題」を実施し、短大の授業へのスムーズな移行を図るとともに、解説を行って知識の定着を図った。また学生全員を対象に栄養士の業務に必要な「栄養士のための基礎数学演習」を実施して、補講が必要な学生を対象に、リメディアル講座や個別指導を継続して行った。その結果、正解率80%~90%までレベルアップを図ることができた。

2年次には、廃棄率や発注量、栄養価計算等、栄養士として働く上で実践に即した内容で計算問題に取り組みさせた。しかし、発注量を求める計算では、41%の正解率にとどまった。今年度はコロナ禍の影響で指導の時間の確保が難しく、1・2年とも後期からの指導となり、十分な取組ができなかった。次年度は、法人局長の中村先生による栄養数学のオンデマンド（限定公開のYouTube）を作成していただいたことで、入学前の事前準備の期間やオリエンテーション、夏季休暇等の際にオンデマンドを活用して栄養数学の効果的な習得に役立てる予定である。

(2) 再履修者及び休・退学者減少に向けた取組

① 困りをもつ学生の早期発見・早期対応

今年度、特に1年生において、オンラインによる自宅学習から対面授業に切り替わった際に、クラスに馴染めず、困りを抱えたり授業を欠席したりする学生がみられた。しかし、学科会議等で情報を共有して共通理解を図るとともに、担任による学生への面談や保護者・カウンセラーとの連携による適切な対応により休退学者を最少人数に抑えることができた。

② 非常勤講師との情報交換会の開催

今年度は、コロナ禍で開催が厳しかったため、書面やメール等で連携し、学生の対応について共有することができた。

(3) オンライン授業を含めた授業改善の取組

令和2年6月上旬（オンライン授業実施期間中）に行った学科独自のオンライン授業に関するアンケートでは、1年生（98.6%）2年生（95%）の学生が「満足している」と答えていた。しかし、対面授業が始まってからの「学生支援満足度アンケート」では、「満足している」が1年生64%、2年生68%で、1,2年生とも3割以上の学生が満足とは言えない状況であった。オンライン授業は対面授業と比較すると、分かりにくさは否めない。

オンライン授業に関して、学生は何らかの活動ができる場面を求めていることがアンケート調査から分かった。このことを踏まえて授業の在り方を見直し、重要事項を書き込ませるプリントを用意したり、テキストの重要語句にラインを引かせたりするような学ばせ方を工夫する必要がある。

また、学生の実態をもとに教材を分かりやすく作成するとともに、学習作業・学習活動を工夫して確実に習熟できるように授業を設計することも必要と考える。学生が向上感をもてるように、講義の初回と最終回では、知識や技能や見方・感じ方・考え方が広がったり深まったりしたことを自覚させるような取り組みを工夫することも必要と考える。

(4) アセスメントポリシーに基づいた学生支援

建学の精神に基づいた学生生活への取組と目標達成のために、栄養士免許・卒業必修科目において、それぞれの科目の到達目標や満足度、成績等をカルテ内容とした一覧票にして学生が自己評価を行った。

その結果、GPAの下位者グループにおいて有意（ $p < 0.05$ ）にGPAが上昇していることが分かった。今回の取組みは成績の底上げに関して有用性が示唆されたが、課題としては、個人面談での指導内容にばらつきが生じないよう基準の作成も必要である。

(5) 九州栄養福祉大学3年次への編入の養成

1年次より担任や学科教員による学生の状況把握を行い、編入の心構えや意識の醸成を図った。また2年次には学生の実情に応じて編入に向けた取組を促したことで、今年度は7名の学生が九州栄養福祉大学食物栄養学科3年次に編入することができた。

3. 社会で活躍できる栄養士養成のための支援

社会に貢献できる栄養士としての資質や豊かな人間性向上のための教育・支援として1年・2年ともに、栄養士課程の教科時間内では取り上げることが難しい内容を盛り込んだ「キャリアアップ演習Ⅰ・Ⅱ」を卒業必修として開講した。

1年生では、基本的な生活環境を整える講座をはじめ、就職活動についての意識付けを行う講座も実施した。2年生では、学科教員による栄養士実力認定試験に向けた模擬テストとその解説を中心に取り組んだ。

受講した学生のアンケート結果では、①テーマが適切であったか(85%) ②内容が理解できたか(82%) ③社会に活用できるか(83%)であり、8割以上の学生が内容について満足している結果であった。

4. 職業意識の確立へ向けた就職活動の支援

食物栄養学科で取得できる免許や資格を生かした職業に就いている卒業生との交流会を計画し、情報交換を通して社会における栄養士活動や社会人としての役割等を学ぶ機会を開催し、職業意識の確立に繋げた。

特に今年度はコロナ禍で不利な状況が予測されたため、早い時期から将来の目標（就職・編入）を学修カルテに記載させ、個人面談を繰り返し行うことで、就職内定率を高めることに繋げることができた。また、就職指導課と学生の性格特性などについて情報共有を行うことで、長所を活かすことが可能な企業や施設に支援することが出来た。

5. 建学の精神を理解した学校行事・生活指導への取組

今年度はコロナ禍のため行事教育を行うことが難しかったが、本学の建学の精神の理解については、栄養士養成の観点から重要であることから、キャリアアップ演習、ホームルームなどを通じて機会あるごとに理解を促した。

令和3年度 教育目標

— 食物栄養学科 —

<教育目標>

「建学の精神」に基づき、豊かな人間性を育み、栄養士に必要な専門的知識と多様な技術を習得することで、「食」をとおして人々の健康づくりに寄与し、地域社会に貢献できる栄養士を養成する。

1. アドミッションポリシーに沿った学生募集の組織的な取組

学生募集については、引き続き重点課題とし、学科教員が同じ認識をもち共通理解を図りながら学生募集に取り組む。下記(1)～(5)の取組等を通して、入学者数の数値目標として定員の70名を確保したいと考える。

(1)学園高校食物文化科との連携による高大連携授業の実施

昨年度に引き続き、学園高校食物文化科の学級担任や進路担当教諭等と連携して、情報交換を行いながら生徒の進路の現状や保護者のニーズ等の把握に努め、学生募集の増加を図る。また令和元年度から実施している食物文化科の1・2年生を対象とした高大連携授業を引き続き実施する。生徒が本学科に興味や親しみをもち、進学したいという気持ちを高めてもらえるよう工夫を行いながら、前期に2年生、後期に1年生対象の授業を行う。

(2)出前講義・進学ガイダンスの充実

学生募集においては、出前講義や進学ガイダンスの充実が大切である。それには、各高校の実情について共通理解し、高校生にとって分かりやすい視覚に訴えるような資料を作成し、学科の特徴や栄養士免許取得の魅力について理解を深めてもらうことで学生募集につなげる。

(3)学校見学会等の充実

本学のガイドラインに沿って感染防止対策を図りながら、学校見学会やオープンキャンパスを実施し学生募集に努める。具体的には、高校生が本学科の学修内容に関心・興味をもち理解が深まるよう、学科の魅力や特徴等を中心に据えた説明を行うなど内容の充実を図る。また、日本栄養士会とも連携し、栄養士活動についての理解や周知を図る。

(4)男女共学に伴うカリキュラム見直しの検討

本学科は2019年度から男子学生の募集を行っており、令和3年度は7名の男子学生が在籍している。男女ともに栄養士免許を生かした職業につなげられるような新たな資格取得やカリキュラムの見直しについて検討を進めていく。

2. 教育支援の体制強化と学修の質の向上

近年、学修面の不安やコミュニケーション不足、さらにキャリアへの不安を抱える学生がみられることから、それらを解消する手立てが必要と考える。さらに休学・退学者の減少に向けても、学生の目線に立った学修内容や生活面等の指導及び充実した学生生活のための支援体制を充実する。

(1)基礎学力の向上

学修面の不安を軽減し、実践力のある栄養士を養成するには、栄養士として必要な基礎学力の定着が必須である。

1年次では「入学前課題」を実施し、短大の授業へのスムーズな移行を図るとともに、解説を行って知識の定着を図る。また学生全員を対象に栄養士の業務に必要な「栄養士のための基礎数学演習」を実施して、補講が必要な学生を対象に個別指導を継続して実施する。その際には、中村法人局長によるオンデマンドの講座を活用させていただき、栄養士業務に必要な計算力の向上を図るとともに基礎学力の底上げを図る。

2年次には「栄養士のための基礎演習」として、廃棄率や発注量、栄養価の計算など、実践的な計算問題に取り組みさせる。栄養数学のテキストを使用して全員を対象に確認テストを行い、補講が必要な学生には個別指導を実施する。さらに、食品成分表を使った実践的な問題にも取り組み、到達基準に達していない学生には補講や個別指導を実施するとともに、各教科での指導も併せて行う。

(2)再履修者及び休・退学者減少に向けた取組

再履修者及び休・退学者をなくすには、担任や教科担当等による学生の状況の把握と早期の対応が求められる。

①困りをもつ学生の早期発見・早期対応

欠席・遅刻が目立つ学生や課題が未提出の学生等について、学科会議等で情報を共有して共通理解を図り、困りをもつ学生の早期発見に努める。また、担任による学生への面談や保護者との連携による早期対応に努める。さらにオフィスアワー等を活用して教科担当による学生への指導も行い、きめ細かな対応を行う。

②非常勤講師との情報交換会の開催

非常勤講師との情報交換会を年1回開催し、学生の実情に合わせた授業内容や定期試験に向けた対応等について協議し、共通理解を図りながら学生の支援に向けた組織的な対応を行う。

(3)分かりやすい授業の工夫

学生の興味・関心を引き出しながら分かる授業を行うには授業の工夫も大切である。授業の目的や自主学習の必要性等を明示し、授業の速度を考慮しながら分かりやすい説明を行って、学生の実情に合わせた授業展開を行う。また対話的で深い学び（アクティブラーニング）に向けた授業の取組を行う。

(4)特別支援教育の観点からの学生理解及び支援

近年、合理的な配慮が必要な学生が少なからず見受けられる。学生の合理的配慮の必要性の有無や生活サイクル、将来の目標等の内容を記した学科独自の学生状況調査票を作成し、保健室や学生指導課、カウンセラー等と連携して、共通理解を図りながら学生に寄り添った支援に当たる。

(5)アセスメントポリシーに基づいた学生支援

建学の精神に基づいた学生生活への取組と目標達成のために、栄養士免許・卒業必修科目において、それぞれの科目の到達目標や満足度、成績等をカルテ内容とした一覧票にして学生が自己評価を行う。そのことにより、学生の履修の意義やモチベーションを維持するとともに、不足している知識・技能についても明確化を図る。

(6)九州栄養福祉大学 3 年次への編入の養成

九州栄養福祉大学 3 年次への編入に向けて、担任による面談の際に学生の希望や状況等を把握し、1 年次より編入の心構えや意識の醸成を図る。また 2 年次の当初より、学生の実情に応じて編入に向けた取組を促し、本学科からの編入希望者数の増加に努める。

3. 社会で活躍できる栄養士養成のための支援

社会に貢献できる栄養士としての資質や豊かな人間性向上のための教育・支援として 1・2 年ともに、栄養士課程の教科時間内では取り上げることが難しい内容を盛り込んだ「キャリアアップ演習 I・II」を卒業必修として開講する。

1 年生では、基本的な生活環境を整える「身だしなみ講座」や「性犯罪から身を守る」等の講座の他、就職活動についての意識付けを行うために「就職活動に関して卒業生からのアドバイス」等の講座も実施する。

2 年生では、学科教員による栄養士実力認定試験に向けた模擬テストとその解説を中心に取り組む。また卒業後の社会人として必要な「社会人のマナー」や、栄養士業務で就職している卒業生を講師とした講座「先輩に学ぶ」等、教科の時間では取り上げることが難しい内容について、キャリアアップ演習を卒業必修科目として受講させ、学科教員が共通理解を図りながら取り組んでいく。

4. 建学の精神を理解した学校行事・生活指導への取組

建学の精神に基づく行事教育、生活指導教育は、キャリアアップ演習、ホームルームなどを通じて機会あるごとに理解を促す。特に生活指導に関する教育は栄養士養成の上でも重要であり、社会に奉仕できる人間力や実践力を身につけさせるには、まず教員が建学の精神を十分理解し、授業等を通して指導していくことが大切である。

5. 職業意識の確立へ向けた就職活動の支援

食物栄養学科で取得できる免許や資格を生かした職業に就いている卒業生との交流会を計画し、情報交換を通して社会における栄養士活動や社会人としての役割等を学ばせ、職業意識の確立や就職活動の一助とする。

また、早い時期から個人面談を行い、就職指導課と連携して学生の性格特性などについて情報共有を行うことで、就職内定率を 100 %にする。

令和2年度 教育目標の達成状況

— 専攻科 —

「建学の精神」の理念を育み、地域社会に信頼され貢献する介護福祉士の育成を目指し、専門教育ならびに社会性の修得を教育目標とする。

1. 専門的な知識・技術の体系的な修得

(1) 新型コロナウイルス感染禍における教育活動

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により、オンライン授業・在宅学習の導入、介護実習内容の変更、学外演習の中止等、例年とは異なる教育活動を余儀なくされた一年であった。一年課程の本科では限りある時間の中で学生の専門性習得に向けて教員間の情報共有と連携を強化。また、積極的に学生とのコミュニケーションを図り良好な関係性を形成しながら、通常の学生生活に不足ない1年となるように尽力した。介護実習では実習施設の確保に苦慮したが、3回の実習全てにおいて現場での実習が実現できた。また、学外講師の派遣、視聴覚教材の充実に取り組み、学外演習の代替にも努めた。

このたび、オンライン授業の導入によって、登校困難な事態が生じた際にも授業の開講が可能となり、また、オンデマンドを活用した予習、復習等の自宅学習の環境も構築された。他方、不測の事態に対応し得る実習体制の検討や授業変更の際のマニュアルの作成等が検討課題となった。これら課題の改善とともに、オンライン教育の利点を最大限に活用しながら学生の学びを一層充実していく所存である。

(2) 授業内容の充実と教員間の連携

日頃より教員間の情報共有と連携を通して、分かりやすい授業の展開に努めている。また、食物栄養学科との連携授業では各専門領域の講義・演習授業により学生の知見を深めることができた。今後もより一層の充実を図る所存である。

他方、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実習施設の確保が困難となり介護実習の内容を変更する状況が生じた。不測の事態に対応し得る実習体制について実習施設と協働しながら検討を進める。

(3) 国家試験受験対策の強化

国家試験対策は4年目を迎え、試行錯誤のなか対策の型が軌道に乗り、得点率が80%を越えるなど(合格ラインは約61%)、高得点で合格を手にする学生が増えている。一方で日頃の事前・事後学習の習慣化や苦手教科対策においては課題があるため、今後も、多様な学生に合わせた最適な指導が可能となるように対策の強化、充実を図る。

(4) 主体的学習促進に向けた環境づくり

今年度、事前学習(自宅における予習)を配布し自己学習の習慣化を目指した。また、前期から国家試験対策の意識づけに取り組んだ結果、福祉住環境コーディネーター検定試験にも自主的に取り組む姿が見られた。学外研修の実施が困難であったため、実習報告、研究発表、グループディスカッションの機会を充実し、「専門性が具わる実感(達成感)」の会得に尽力した。主体的

学習の根底には専門分野に関する探究心が重要であると考えている。今後は、専門領域に関する様々な情報提供(動向、最新の取り組み、研究等)や学生の関心分野の学びが深まる方策を教授する等、学ぶ楽しさが湧出する働きかけを行っていききたい。

2. 「社会性の育成」に向けて

(1) 社会規範の理解と礼節の育成

社会人として必要な基礎的力を培うため、期限の厳守、「報告、連絡、相談」、授業の出席については指導を徹底した。また、報告や発表の機会を通じて、社会人に必要な態度と責任感の形成を目指した。個々の学生の社会性習得度に関する評価の方法が課題であるため、習得状況の把握や指導のあり方について検討を深めていく。

(2) 就職活動の支援

早期から就職アンケート調査や面談を実施したことにより、学生の意向の把握と希望する就職活動の支援を充実することができた。個別支援として、履歴書作成の指導、作文の書き方指導、模擬面接を実施し、全学生が希望先への就職を果たした。次年度は、就職指導の効率化と学生の就職活動の準備を目的として、前期に専攻科生全体を対象とした就職ガイダンスを実施する。併せて、就職指導課や保育学科との連携を充実し就職活動の支援に万全を期していく。

3. 「筑紫の心」に基づいた地域社会に信頼され貢献する人材の育成

(1) 「筑紫の心」を養う取り組み

今年度、お掃除に対する意識化を目指して新たに美化委員を設けた。また、日々の清掃活動や講義室・実習室の大掃除を学生と全教員がともに取り組むなかで、お掃除の習慣化に至ることができた。行事については新型コロナウイルス感染症の影響で多くの制限があったが、秋の文化イベントでは専攻科全体で協力しながら動画を作成した。

(2) 地域社会における活動

今年度は学外における活動展開が困難であった。本科では学外の演習や学びを非常に重視しているため、今後、状況をみながら実践力やコミュニケーション力の育成と視野の拡充を目指して地域に向かう活動を推進する。

4. 学生募集に向けた対策の強化

(1) 保育学科との連携

今年度、学内学生募集においては、新型コロナウイルス感染症対策のためガイダンス時期の遅延が生じたが保育学科の1・2年生に向けて介護福祉分野の様々な情報提供や専攻科生からのメッセージを発信した。その他、介護福祉業務に関するイメージの転換を重視し、専攻科卒業生の講話の機会、年間を通じた案内資料の配布、交流授業、茶話会の開催にも取り組んだが、進学予定者数は数名に留まっている。

保育学科1年生の意識調査(令和3年2月実施)では、「専攻科に進学する」また「検討してみたい」と回答した学生は29名(24%)であった。他方、専攻科のことを知らずに入学した学生は38名(31%)であり、認知度の低さや関心の薄さが判明した。保育学科2年間と専攻科1年間の計3年間で3つの資格取得が可能となる利点や将来性について、広く認知度を高めるためにも高校訪問や広報活動

の強化に重点的に取り組む必要がある。併せて、保育学科教員と定期的な情報交換会を開催し、協働しながら進学者数の目標を定め増員を目指していく。

(2) 情報発信の展開

入学者数の減少が止まらず、危機感をもって学生募集に取り組んだ。学内の募集活動に加えて、他学への学校訪問と入学案内・募集要項の配布を実施した。本学専攻科の知名度が低かったことや訪問時期が遅くなったこともあり、入学生の確保には至ることができなかった。

今年度、学生募集のあり方を全面的に見直し、学内・学外における広報活動の展開を通して令和4年度からの入学生増員を目指す3ヶ年活動計画を提示した。募集の対象と手段を明確にしたうえで、計画的に募集活動に取り組んでいく。保育学科や広報関連部署との協働のもとに入学生の増員に向けた取り組みを徹底していく所存である。

令和3年度 教育目標

— 専攻科 —

「建学の精神」の理念を育み、地域社会に信頼され貢献する介護福祉士の育成を目指し、専門教育ならびに社会性の修得を教育目標とする。

1. 専門的な知識・技術の体系的な修得

(1) 新型コロナウイルス感染禍における教育活動の充実

円滑な授業遂行と介護実習の実施に向けて感染症予防対策を徹底し、緊張感をもって日々の予防対策を堅固にする。学生と教員間の対話を重視し、日頃から熱計表の記入や体調管理、実習前の指導に関する共通認識を徹底する。

授業や実習に関しては不測の事態にも滞ることのないように、オンライン化の準備や実習先との情報共有、学外演習の代替内容の確保に取り組んでおく。

(2) 授業内容の充実とカリキュラム改正への取り組み

2022年度より介護福祉士養成課程は全面的に新カリキュラムへと転換する。複雑化する介護福祉ニーズに対応し介護福祉の中核的な役割を担う人材の育成という新しい教育内容の趣旨のもとに、新しいカリキュラムの編成等を進めるとともに本科に必要な授業体系について検討する。

専門性の習得については「分かりやすい授業」、「知識と技術の定着」の充実に努めていく。具体的には、①日々の教材研究と科目間の擦り合わせ、②教員協働による体系的な修得の遂行、③学生一人ひとりの特性と学びを理解した柔軟な教育活動の実践、に教員全体で尽力する。併せて、オンデマンドを活用した予習・復習等の自己学習を導入し、学生の学習習慣の向上を進める。

(3) 主体的学習促進に向けた環境づくり

今年度も「自己学習の習慣化」「専門性が具わる実感(達成感)」を重要視した取り組みに尽力する。学習の主体性向上の土台には、学び成長することが楽しいと実感できる教育環境の形成が不可欠である。専門領域に関する様々な情報提供や関心分野への探求心が広がる対話など、学ぶ愉しさが湧き出す働きかけを大切にしていきたい。特に、本科が重視している学外での学びの充実や福祉住環境コーディネーター検定試験の対策、図書館の活用を強化し、学びの融合、現場における実践力、応用力の形成を目指していく。

(4) 国家試験受験対策の強化

国家試験では高得点で合格を手にする学生が増す一方で、日頃の事前・事後学習の習慣化や苦手教科対策においては課題が残っている。教員間で協力し、個々の学生に合わせた最適な指導を共通認識としながら、今年度も国家試験対策の強化、充実に図り100%の合格に尽力する。

2. 社会性の育成に向けて

(1) 社会規範の理解と礼節の育成

今年度も、引き続き、社会人として必要な礼節や規律性の定着を目指していく。あいさつ、授業の出席、時間・提出物の期限厳守、報告・連絡・相談、適切なコミュニケーション力等が身に付くように、日々の授業や教育活動を通して指導を徹底する。しかし、個々の学生の社会性習得度に関する評

価方法が定まっておらず、理解度や定着度合については不明瞭な状況である。今後は、習得状況の把握や指導のあり方、評価シートの作成について検討を進め、社会人に必要とされる基礎的な力の定着を目指して取り組んでいく。

(2) 就職活動の支援

今年度は就職指導の効率化と学生の就職活動の準備を目的として、前期に専攻科生全体を対象とした就職ガイダンスを実施する。就職活動の流れ、就職先選定の視点、模擬面談、履歴書作成等について統一した指導を行っていく。また、就職面談や日頃の進路相談を通して学生の意向や特性を大切にしたい就職支援に万全を期していく。

3. 「筑紫の心」に基づいた地域社会に信頼され貢献する人材の育成

(1) 「筑紫の心」を養う取り組み

筑紫の心を理解し、日々の生活場面のなかで結び付けていけるように、様々な場面を通して学生に声をかけながら四つの芽を育てていく。学生それぞれが、前に踏み出す力、学ぶ意欲、他者に対する思いやりや優しさ、コミュニケーション力を養い、筑紫の四つの心が調和し根付いていくような教育活動の展開を目指したい。また、日々のお掃除の定着、行事教育の意義の理解についても丁寧に指導を行い、自己の役割を理解し責任ある行動ができる学生の育成を目指す。

(2) 地域社会における活動

実践力やコミュニケーション力の育成と視野の拡充を目指して、地域交流の機会を設けていきたい。感染症予防対策に留意しながらボランティア活動や多世代交流等に臨み、専門職意識の向上と地域社会への貢献意識を高めていきたい。

4. 学生募集に向けた対策の強化

(1) 広報活動の転換

学内外に向けた広報の手段・方法を具体化し、関連部署との連携、協働のもとに入学生の増員のための広報活動を強化する。具体的には、「専攻科(介護福祉専攻)入学生増員に向けた活動計画」を基にして、下記の5つの対象に必要な広報活動を計画的に展開する。特に学外への広報活動では、本科の認知度の向上と魅力の発信を焦点に取り組み、学外入学生の増員も目指していく。

[1. 本校保育学科 2. 他校(保育士養成校) 3. 高校生 4. 保育学科卒業生 5. 保育士資格を有する一般社会人]

(2) 保育学科との協働と計画的展開

内部進学は本科入学生の要であり、保育学科生に向けた広報活動は最重要事項である。保育学科との協働のもとに以下の年間計画を遂行し、入学生増員の取り組みを徹底する。

- ・保育学科との進学に関する懇談会の定期開催
- ・1年生、2年生の専攻科ガイダンスの増加
- ・保育科の授業の担当や関連する科目における専攻科教員による交流授業の実施
- ・学生からの相談窓口を専攻科に設置
- ・体験授業、「専攻 café」、専攻科卒業生や在校生との交流会などの定期実施
- ・専攻科進学に関するイベント開催情報の掲示、発信(UNIPA など)
- ・早期(7月～8月)の入学試験の実施
- ・保育学科生意識調査の実施

令和2年度 達成状況

— 学 生 部 —

本年度の学生部における重点課題は、Ⅰ. 学生支援・教育指導体制の強化・充実、Ⅱ. 学生部の業務の改善及び情報化の推進の2つを柱とし、学生指導課及び就職指導課それぞれで具体的な活動目標を掲げ実践した。また、新型コロナウイルス感染症対策に関する様々な対策・対応に尽力した。以下、本年度の業務内容計画・目標の検証及び評価と次年度に向けた課題について報告する。

【学生指導課】

◆ 学生生活の充実・支援

① 学生生活の規範の確立

□学生及び教職員に対する行事教育・人格教育の意義や意味の共通理解

本年度は、コロナ禍の影響で、昨年度までのような対面による行事教育・人格教育が行えなかったが、メール会議等を利用し、学生委員会での反省事項等を報告・連絡・相談し、確認・協議しながら業務改善に努めた。学生への周知は、本学ホームページや学生支援システム「UNIPA」で行い、学生への理解につなげた。各学科との連絡・相談等も電話やメール、UNIPA等を利用し、積極的に行事教育の意義や意味を共有した。各種の全学的行事については、感染拡大防止の観点から中止せざるを得ないものは、録画した映像をオンデマンド配信するなど創意工夫し、規模縮小で実施したものは、「イベント等における感染拡大防止ガイドライン」に基づき、緻密な計画を立案し、支障なく運営することができた。

□学生の休退学に関する原因の分析及び各学部・学科との連携による防止対策の推進

昨年度までと同様に、各学科のクラス担任を中心に担当学生の授業出席状況を適宜確認し、遅刻・欠席が目立つ学生に対しては、保護者を含めて連絡・面談などを実施してもらうことで、休退学に陥りそうな学生の早期把握・対応に努めた。また、現在休学中の学生への定期連絡や相談対応など、学生の復学に向けての取り組みの推進・強化を図った。以上の際も、連絡には、電話、メール、UNIPA、郵便等を活用し、対面が必要な場合でも、公共機関等の混雑を避ける時間帯に行い、コロナ対策に万全を期して対応した。

今年度状況：(1月29日付、[] は昨年1/29付実績、GAKUENより)

休学：26[37]件 (管：5[5] 理：13[7] 作：2[7] 美：0[1] 保：3[11] 栄：3[6] 専：0[0])

退学：18[18]件 (管：1[6] 理：4[6] 作：3[1] 美：0[2] 保：9[2] 栄：1[1] 専：0[0])

② 学生相談・支援体制の確立

学生部長、看護師、カウンセラー、当該学科長及び担任等による情報共有並びに学生指導上に関する問題点や配慮すべきことなどについて慎重に協議・検討するとともに、厚生委員会を通じて各学科との連携を図り、学生指導に役立てた。

特に、今年度は、コロナ感染症防止対策のための学内ポスター掲示やUNIPAでの配信、新たに導入されたデジタルサイネージ（電子掲示板）上での掲示等を用いて注意喚起を図りつつ、熱発等の症状

が報告された場合の対応フローチャートを作成し、それに従い組織的な対応を徹底した。

特別に配慮が必要な学生に対する案件は、個々に異なり、課題も多様であり、対面で行う場合もあったが、コロナ対策に万全を期した上で、個別に協議・対応した。また、「特別配慮申請」の手続きを組織的かつ簡便にできるように、申請手順や指定様式を厚生委員会で協議・検討し作成した。

「高等教育の修学支援新制度」により、これまで経済的な理由で就学が困難な学生にも就学の門戸が開かれたが、コロナ禍による家庭の経済逼迫による休退学が増えることが予想された。しかし、課員の新制度への深い理解と学生へのたゆまぬ対応に加え、担任との情報共有と協力を得て、前年比で休学者数は減少し、退学者数は同数に抑えることができた。また、「学生支援緊急給付金」については、就職指導課との連携・協力により、募集と審査が滞りなく行われ、更に多くの学生に対する支援につながった。

コロナ禍により、オンライン授業が取り入れられたが、インターネット環境が整っていない学生には、情報管理センターの協力により、ポケット Wi-Fi 貸出の支援策を実現できた。

③ 学友会執行部の体制強化とキャンパス間学生交流の実現

学友会執行部の体制強化については、コロナ禍により、積極的な募集活動が行えなかったが、学友会活動の勧誘プレゼンテーションをオンラインで新入生に視聴してもらい、担任等にも協力を依頼し、現在も、新入生部員獲得に尽力している。学友会関連行事のうち新入生歓迎行事、レクスポ、大学祭はコロナ禍により中止となった。学友会選挙においては、UNIPA を利用し、オンライン選挙を掲示し、そのアンケート機能を利用し集計を行い、執行部人事等の採決も無事に行うことができた。また、クラブ・サークルの部員募集のため、本学独自の授業配信システムを使い、サークル紹介動画を録画し、秋イベント「Fall Fes 2020」と銘打って期間限定で、配信した。計画・運営においては、オンライン授業と対面授業で過密な時間割のなか、執行部員一人ひとりが自主性と責任感をもって活動した。また、例年行われる九州地区大学体育協議会主催のリーダーズトレーニングや福岡県下執行部交流会も中止となり、本学独自の「リーダーズトレーニング合宿」も実施できなかった。

キャンパス間の学生交流については、例年実施している「種蒔き祭」「収穫祭」といった学内農園行事での交流もコロナ禍により中止された。

④ 国際交流に向けての取り組み

昨年度新たに、米国ベルビュー市のベルビューカレッジと協力提携し、学生の英語圏での海外研修・短期留学等の受け入れ先として、具体的に8月実施のプログラムの提案もあったが、コロナ禍で、海外渡航が難しくなり、残念ながら実施できなかった。同様に、台湾・韓国研修も中止となった。

◆ 危機管理及び業務管理体制の構築

① 危機管理体制の構築

コロナ感染が広まりはじめた昨年2月、いち早く「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策本部」を設置した。そこでの定例会議で、コロナ感染症対策を協議し、実行に移した。この会議では、本学独自のBCP（行動指針）を策定し、それに基づき万全な体制を整え、感染症対策を実践した。また、これらの決定は、各クラスの緊急連絡網やUNIPA及び本学ホームページを活用し、連絡や掲示が行われ、迅速かつ効果的に全学的な周知がなされた。

② 事務処理作業の効率化

□各種証書等費用の券売機及びデジタルサイネージ（電子掲示板）の導入

これまで、学生が証明書類等を入手する場合、会計課、教務課、学生指導課と最大3箇所への移動が必要で、諸手続きが煩雑であった。今年度、各種証書等費用の券売機を学生部の出入り口付近に設置することにより、動線及び諸手続きが簡素化されたと同時に、各課員の業務の効率化及び作業量の軽減が実現された。

各号館入口に設置されたデジタルサイネージ（電子掲示板）を学生や教職員への注意喚起やお知らせに活用した。従来の紙媒体の掲示物とくらべ、視覚的なアピールやタイムリーな情報発信が可能となった。

□業務内容の見直し・改善

課員の更なる資質向上及び人材育成のため、学内外を問わずSD研修会等への積極的参加が望まれたが、コロナ禍で、ことごとく中止となり、配布物で各自が学ぶこととなった。

一方、オンラインで実施された会議もあり、オンライン会議参加のスキルが身についた。

両（北区・南区）キャンパス間における職員同士の対面でのコミュニケーションは、コロナ禍により困難となったが、電話やメールによる情報共有や相談の頻度が増え、異なったレベルで連携体制が強化された。特に、新設された授業料減免及び給付型奨学金制度に関する刻々とアップデートされる情報の共有は必須で、新しい情報を得るたびにお互いがそれを共有し、共通理解を深めることで南北間の連携も強化された。

③ 学生寮、カフェテリア、ショップに対する連携・強化

□学生寮における健康・衛生管理の徹底

寮監との連携を密にし、健康・衛生管理の徹底を図ることで、食中毒やコロナを含む感染症などの集団発生を未然に防止できた。特に、冬場のインフルエンザや感染性腸炎等の発症を未然に防ぐため、寮生に対してはインフルエンザワクチンの予防接種を推奨するとともに、手洗い・うがい・マスク着用の励行を周知・徹底した。学生寮内でのコロナ感染と拡大が危惧されたが、寮生の相部屋をなくし各部屋1人にするなどの対策により未然に防ぐことができた。

また、寮内でも、オンライン授業が受けられるよう、必要な学生には、情報管理センターの協力により、ポケットWi-Fiが貸し出された。

□カフェテリア及びショップ等に対する衛生管理及び学生満足度の向上

コロナ禍で、前期は、一部の実験・実習の科目を除き、オンライン授業となり、委託業者には運営面での苦労や負担を強いることとなったが、会計課との連携により、1日あたりの食数の補償や提供方法の工夫により乗り越えることができた。後期になり、対面とオンラインの併用授業が始まり、カフェテリア利用が再開されたので、夏休み中に、庶務課に依頼して飲食テーブルのパーティション設置し、すべての席がパーティションにより個室化された。また、感染防止対策として、各学科に協力を仰ぎ、昼食中のカフェテリアや学生ホール等の巡回も実施した。また、カフェテリア及び学生ホール内に、オゾン式空気清浄機や加湿器も設置した。さらに、カフェテリアのスタッフも積極的に学生から意見・要望等を聞き、単品や低価格の商品を作るなど学生のニーズに合わせたメニューを考案し、学生の要望にも応えることができた。

【就職指導課】

① 公務員 Web 講座の充実

公務員合格者 大学：2名（昨年3名）短大〔保育〕1名（昨年3名）

令和2年度より Web 講義とスクーリング講義とをミックスした公務員講座を開講し進めていたが、最後の追込み時期である3月のスクーリング講義がコロナの影響で全て中止となり、一部の科目のスクーリングができずに、各自で課題に取り組むこととなった。また面接練習もコロナの影響で、十分な時間がとれなかった。その影響もあり、今年度の公務員合格者は減少したものと考えられる。次年度はコロナ感染予防対策も考え、全て Web での講義に進めて行く考えである。

② 各学部・学科との連携と学内説明会の充実

今年度から九栄大2年生へ就職ガイダンスとして2コマ頂き、学年主任の先生と連携を取り要望を聞くなどし、マイナビに講座を依頼、就職指導課からは、課の説明と2年生が今取り組むべきことなどを解説した。必要な情報を届けることができたのと、就職活動するうえでの心構えができたと感じた。よって次年度以降も2年生からの就職ガイダンスが定着するよう努めていきたい。

対面による学内の企業説明会の開催を前期1回（大学4年・短大2年対象）、後期に1回（大学3年・短大1年対象）を計画していたが、コロナの影響により中止せざるを得なかった。対面に替わる説明会として全学年を対象とした Web オンラインシステムによる企業説明会を11月に開催した。20社の企業参加を目標に北九州市合同説明会参加企業の約100社に声かけをしたものの、コロナの影響で企業様も次年度求人が定まらないのと、対面での説明会を希望してる企業が多かったのもあり、5社での開催となったが、本学初の試みでもあり、学生も関心のある企業を知ることができたのは良かったと思われる。次年度以降もコロナの感染状況や開催時期などを踏まえ、多くの学生が参加してもらえるよう開催を検討していく方針である。

③ 地元法人（企業）との関係強化と地元就職率の増加

商工会議所や北九州市などの企業情報を活用して、本学の特性を活かすことのできる企業様へのご挨拶等計画していたが、コロナの影響で取り止めとした。ただ、コロナの沈静していた時期に開催された北九州市と商工会議所主催の合同説明会には参加することができ、約200社の企業とご挨拶することができた。また、地元就職への増加対策として、就職活動している学生に対し教職員が就職活動状況を把握できるシステムの構築を提案（現在は、就職指導課でしか状況把握ができていない）、その予算については北九州市の助成金で申請（約130万円）し対応できることとなり、令和3年2月までには完成予定である。今年度は間に合わなかったが、次年度からは、新システムにより教職員がより一体となり、就職活動の進捗状況の把握に努め、地元企業の求人等を学生にきめ細かく提案し、就職に繋げていきたい。

④ 業務内容の見直し・改善

□学生部としての協力体制の取組

年度当初の学生指導課の通例業務（入学時の定期券申込対応、奨学金対応など）のサポートを行ったり、コロナの影響による就学支援の「学びの継続」給付金の受付から申請まで、全ての業務を担当したりと、就職支援以外の業務にも積極的に携わるよう行動した。また各証明書発行のための券売機

の新規設置により、証明書発行の手続きに来る学生への対応を学生部職員全員で行った。

□コロナ禍での就職指導課の業務内容の見直し・改善

緊急事態宣言を受けて、学生が自宅でも就職相談ができるよう、専用アドレスを開設した（4/13・運用開始、1/29 現在利用件数 399 件）並行して、就職オリエンテーションや対面での個別相談ができなかったため、会社説明会情報や、面接試験に向けての心構えやアドバイスなどを UNIPA で周知するなど、必要と思われる情報を迅速に届けた。

情報管理センター協力のもと、本学独自のビデオ会議システムを利用したオンライン就職相談を 5 月 11 日より開始。8 月までの約 4 ヶ月で面接練習を含む 25 件の相談を受付る。また、6 月末頃からは、企業側も対面による採用活動を再開したため、対面での面接練習を再開、今年度から、事前予約受付により 7 月、9 月、10 月、11 月においては、ほぼ毎日のように 3 件～5 件の面接練習ができた。面接試験も集団やグループワーク、プレゼンなど多様化しており、その試験に合わせた練習も考え取組むこともできた。今年度の面接練習が現在で約 200 件（オンライン含む）昨年が約 120 件であったため、オンラインと事前予約制にしたことで効率良く対応できたと考える。次年度については、面接練習の予約状況を学生が UNIPA で確認できるよう更に取組みたい。

コロナ感染対策として、就職活動関連の図書貸出受付を QR コードでも対応できるようにした。

効率化として、B6 判の就職申込書と推薦書を発行する証明書申込書を 1 枚の A4 サイズの様式に併せたことで、保管業務の削減に繋がった。

本年度の学生部における重点課題は、I. 学生支援・教育指導體制の強化・充実、II. 学生部業務の改善及び情報化の推進の 2 つを柱とし、学生指導課及び就職指導課それぞれで具体的な活動目標を掲げ実践した。以下、本年度の反省と次年度に向けた課題について報告する。

令和3年度 年度目標

— 学 生 部 —

【学生指導課】

◆ 学生生活の充実・支援

① 学生生活の規範の確立

□学生及び教職員に対する行事教育・人格教育の意義や意味の共通理解

コロナ禍が続く場合を想定し、学生委員会を通じての各学科との連携や行事教育の意義や意味をUNIPAや本学ホームページ及び本学オンラインシステム等を活用し共有する。

□学生の休退学に関する原因の分析及び各学部・学科との連携による防止対策の推進

各学科のクラス担任との連携をさらに図り、休退学に陥りそうな学生の早期把握・対応に努める。

② 学生相談・支援体制の確立

保健室及びカウンセリングルームによる学生支援体制を継続するとともに、厚生委員会を通じて各学科との連携を図る。

会議システムを積極的に活用し、オンラインカウンセリング等も選択肢として学生支援に役立てたい。また、双方向での授業ができるまで充実した本学教育システムをオンライン学生対応やオンライン相談に活用する。

デジタルサイネージ（電子掲示板）のコンテンツを充実させ、学生・教職員への情報発信のツールとして更に活用していく。

③ 学友会執行部の体制強化とキャンパス間学生交流の実現

コロナ禍でできる最善の執行部員募集活動を継続し、盤石な体制維持を目指す。また、各種のリーダーズトレーニングへのオンライン参加等を模索し、執行部学生としての役割・心構えなどの涵養に努める。学友会執行部及び学生有志一同が手掛ける両キャンパスの学生交流の企画について、各部署と連携し、実現に向けて取り組む。この際、コロナ感染状況によっては可能なオンラインでの活動も積極的に模索する。

クラブ・サークル活動については、本学コロナ対策本部からの最新ガイドラインを遵守し、かつ、学生にとって最善の利益となるように協議を重ね提案していく。

④ 国際交流に向けての取り組み

現在も続いているコロナ禍で、協力提携先の大学等と協議し、オンラインを活用した国際交流やオンライン留学などを模索していきたい。また、新たに、福岡という地の利を活かし、近隣の東南アジア諸国のうち、公用語が英語であるフィリピンやシンガポール等にも協力先を求めたい。

◆ 危機管理及び業務管理体制の充実・強化

① 危機管理体制の充実

各クラスの緊急連絡網やUNIPA及び本学ホームページを活用し、連絡や掲示のタイムリーかつ効果的な周知法をさらに発展・充実させる。継続して、本学独自のBCP（行動指針）の状況にあった見直しを行い、それに基づき、万全を期した感染症対策を実践する。また、新型コロナウイルス感染症の陽性者のアフターケアを学科及び多部署間の連携により行い、本学及び学生に対する風評被害等を未然に防ぐ。

② 事務処理作業の効率化

□各種証書等費用の券売機及びデジタルサイネージ（電子掲示板）の導入

学生部入口に券売機が導入され簡素化された学生の証明書類の入手法の学生・教職員への周知徹底とさらなる各課員の業務の効率化及び作業量の軽減を目指す。

デジタルサイネージ（電子掲示板）の活用の拡大とコンテンツの充実を図る。

□業務内容の見直し・改善

コロナ禍でも行われるオンライン研修への積極的な参加を目指し、さらなる業務スキルをアップする。また、コロナ禍により、オンラインを駆使した業務活動が活発化し、そこから生まれた新しい形の部署間連携体制をより強固なものにする。

③ 学生寮、カフェテリア、ショップに対する連携・強化

□学生寮における健康・衛生管理の徹底

寮監との連携を密にし、健康・衛生管理の徹底を図ることで、食中毒やコロナを含む感染症などの集団発生を未然に防止する。また、寮食を含めた寮を取り巻く生活環境をより学生にとって快適で満足のものにする。

□カフェテリア及びショップ等に対する衛生管理及び学生満足度の向上

コロナ禍で、流動的となる授業形態（対面及びオンライン、あるいは、ハイブリッド）にあわせて、学内の学生数が変動し、カフェテリアの利用学生数も変わる。そこで、これまで以上に、業者スタッフとの連携・協力し、学生、教職員、業者、全てがウインウインとなるようフレキシブルな対応を図る。

三密が最も懸念される昼食時の新たな解決策として、南区キャンパスでも実績のある業者によるキッチントラック販売を採用し、屋外での昼食販売及び食事提供の開始を目指す。同時に、カフェテリアのメニューのさらなる充実を図り、学生・教職員にとってより魅力あるものにし、売店の取り扱い品目の充実を図る。

【就職指導課】

① 新たな公務員 Web 講座の取組み

今年度は、コロナが発症したことでスクーリング講義が中止になった経緯もあり、次年度においては、全て Web 講座で対応する。PC や携帯端末で何時でも何処でも繰り返し視聴もできるメリットを活かしながら、感染防止対策にもつながる。また、大原職員とのオンライン面談を通して面接練習や質問・相談にも対応できるようにしている。新たな試みでもあり、公務員合格者の増加を目指していく。

② Web 企業説明会の開催

昨年度の学内企業説明会と今年度の Web 企業説明会の開催については、大学新聞社との協賛によるものであり、これまで大学新聞社が開催してきた Web 企業説明会での開催時期や、参加企業の選定などを参考にし、再度開催のやり方を見直し、学生目線を意識した Web 開催を考えたい。

本学の専門分野に関係のある企業の選定や、実習先、就職実績先の企業の選定など学生が関心のある企業選びに時間をかけ、地元就職先へと繋げていきたい。また全学年を対象とした開催を考えており、企業を知ることや、就職先への一つとして考えることにも結びつけていきたい。

③ 地元法人様との関係強化と更なる開拓

法人様が求める学生について情報収集に努めていきたい。受入先から見た卒業生の評価などを、訪問や本学の IR 推進本部が行っている就職アンケート調査などを利用することで、各法人様が求めている（社風に合う）学生像を事前に把握することにより、新システムを利用して情報を共有し、教員と一緒に効率的な就職指導を進めることができ、ひいては地元法人様との関係強化にも繋がるものと考えられる。また、学生においても法人様の情報を伝えることで、法人様を知ることができ、自信への後押しになると考える。

実習先でありながら求人がないケースもあるので、先生方が実習先訪問する際に一緒に帯同を試みるなど、学部・学科と連携し新たな就職先として開拓していきたい。

以上の内容を愚直に実行し、地元法人様との関係強化に結び付けたい。

④ 業務内容の見直し・改善

コロナ禍の状況が続く中で、効果的で且つ感染対策をしっかりと行った就職対策特別講座を検討する必要があると考え、感染対策の意味から、本学独自のオンラインシステムを利用した就職対策特別講座での取組みを考えたい。その一つとして、大学1年生以外の大学・短大各学年のキャリア授業の1~2コマを就職指導課の就職支援授業として組入れたい。授業内容は課員と外部講師とをからめた内容での授業を考え、これまではマイナビを中心に授業を組み入れてきたが、今後は北九州市や若者ワークプラザの利用なども検討していきたい。また、これまでの就職対策特別講座では、3 コースに分かれ受講者を募り対面式で行ってきたが、感染対策を考え、今後は大学4年生、短大2年生全員を対象にオンラインシステムでの開催で検討したい。事前に UNIPA や各館の電子掲示板などでオンライン講義日程などを伝え、昼休みや放課後時間にオンラインを有効活用し何時でも何処でも参加できる講義にする。外部講師の方々にも同様の方法で行い、就職対策として必要な講義を厳選し前期中に行いたい。新たな取組みとして「オンライン相談会」を実施する。本学のビデオ会議システムを利用し「魅せるESのコツ」「映えるWeb面接のコツ」などのテーマを決め、1回30分~60分程度で実施。メリットとして感染対策は勿論であるが、自ら相談に来ない学生にも、場を設ければ参加がしやすく、課員としても学生の動きが把握できる。また学生としても窓口へのハードルも下がり、その後の相談に繋がる。通常の業務としては、今年度同様に学生部として協力していくことの確認や、課内での役割や業務を見直し、業務削減・改善を行いたい。

部内の感染対策として、カウンターやPCスペースに簡易的にビニールで仕切っているが、コロナが長期化しており、次年度はアクリル板などで仕切りをした方が良いと考える。

令和2年度 達成状況

— 教 務 部 —

1. 学生募集について

本年度は入試制度が全国的に見直され、本学においても入試区分等の変更が生じた。A0入試に代わる総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜と入試の名称も変更となったが、もともと本学が実施してきた丁寧な選抜方法のおかげで、大きな選抜方法の変更に至ることはなかった。しかし、受験生にとっては入試制度が変わる初年度ということもあり、また、新型コロナウイルス感染拡大に伴う不安な状況により例年に比べて前倒しの出願傾向となった。特に大学については総合型、学校推薦型選抜は昨年度より志願者を伸ばすことができたが、一般選抜においては減少する結果となった。学生の確保においては次年度においても重要課題である。

本年度の学生募集について計画していた募集活動は新型コロナ感染症によりことごとく中止となってしまった。入試説明会、会場ガイダンス、オープンキャンパス、高校訪問と例年行ってきた学生募集ができなくなり、学生確保が見通せない厳しい状況であった。急遽、学長をはじめ先生方の協力によりオープンキャンパスに代わるインターネットでの動画配信、感染症対策を踏まえての学校見学会、オンラインによるガイダンスとコロナ禍において可能な限り募集活動に取り組んだ。

入試業務においては、昨年度より導入のネット出願により願書受付業務が効率化され、さらに今年より一部の入試（推薦型と一般の出願の多い2か月間に絞って）において合否照会システムを導入することにより、合否結果のスムーズな伝達及び合否書類の発送において入念にチェックを重ねることができた。

2. 教務業務の見直しについて

本年度目標に掲げた教務業務の質の向上と充実について、結果的には別の意味での成果を上げることができたのではないかと考える。

今年度は、コロナ禍と緊急事態宣言により授業開始が遅れ、5月半ばにようやく学部・学科・情報管理センターの協力によりオンラインでの授業が開始された。その後、授業回数確保のための補講手続き等により「UNIPA（教学システム）」を駆使しての登録・変更・確認作業と非常勤講師への連絡調整に追われる一年間であった。これらの業務は例年の数倍に及ぶものであった。その中で否応にも見直しを迫られ急ぎルール化できたものもあった。また、オンライン授業と対面授業の併用で時間ごとに動いていく時間割に対応するため課員同士がコミュニケーションをしっかりと取り、対応のフォローや担当を超えて全体に視点を持つ良いきっかけにつながったと思われる。さらに業務マニュアルについても一年を通して再考を重ねることができ、かつ応用力を培う良い機会となった。

3. 認証評価に向けた取り組みについて

「UNIPA（教学システム）」については、昨年まで学生の利用頻度に頭を悩ませてきたが、今年度はコロナ禍によるオンライン授業等により「UNIPA」は欠かせないものとなった。導入されたのは4年前で、現在の大学4学年が入学時よりスタートしている。このタイミングは本学にとってたいへん好都合

合であったと思われる。来年より本システムを活かした学修の可視化等に向けたポートフォリオも導入され、さらに「UNIPA」の活用は高まると考える。学生のアンケートへの積極的な回答にも期待したい。ポートフォリオについては運用に向けて年度内に先生方との共有を図り、短大の認証評価受審年度に当たる来年度、大学の受審年度となる再来年度と本格的に稼働し、学修成果の可視化、さらには各教科の教育内容の見直しや改善につながるよう取り組んでいきたい。

4. 地域貢献の取り組みについて

本学では平成16年より北九州市内に在住している55歳以上の方々を対象に周望学舎と共催し「シニアカレッジ」を毎年開講してきた。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い残念ながら開催が見送られた。また、幼稚園教諭として活躍している卒業生の支援として毎年取り組んでいる免許更新講習も同様に実施することができなかった。市民カレッジは北九州市の協力の元、1講座ではあるが実施することができた。新型コロナウイルスの感染状況にもよるが、来年度は本学における教育研究が地域貢献に繋がるよう実施に向けて取り組んでいきたい。

令和3年度 年度目標

— 教 務 部 —

1. 学生募集について

本年度の入試結果を真摯に踏まえ、入学定員の確保に向けた学生募集に取り組む。一人でも多くの志願者を確保するために、学校見学会の開催、高校訪問、出前講義や進学ガイダンスなど内容の検討も含め可能な限り取り組む。

2. 教務業務の見直しについて

教務業務の質の向上に努める。教育過程における学生支援と教育の成果に向けて業務内容の精査と充実をはかる。また、各々が昨年度の反省を踏まえた改善と教育体制の支援及び情報の共有化に向けて業務の効率化に努める。

3. 認証評価に向けた取り組みについて

来年受審予定の認証評価に向けて、教務が関わる業務内容の精査に取り組む。また、建学の精神や教育理念、3つのポリシー等と学修の成果の可視化へ向けたポートフォリオの運用をはかる。

4. 地域貢献の取り組みについて

本学の建学の精神に基づいた地域貢献の取り組みの一つとして、生活者実学の研究成果を地域の方々に還元し、生涯学習に関与するため、シニアカレッジや市民カレッジ等の公開講座の実施に向けて取り組む。

また、幼稚園教諭として活躍している卒業生の支援として、免許状更新講習を本年度は実施に向けて取り組む。

令和2年度 達成状況

－ 事 務 部 －

- ・学友会館の耐震補強

各部署と連携しながら冬休み期間中を中心に工事を実施した結果、学生の不便を最小限度に留めることができた。

- ・業務引継ぎと業務マニュアルの充実

最大の懸案事項である給与関連業務については完了済み。業務マニュアルについては順次作成中である。

- ・在学証明書等各種証明書発行の受付・代金収納業務を自動券売機へ移行

各種証明書の発行頻度が高い学生部に自動券売機を設置済み。発行依頼書を簡素化し、いつでも発行代金支払いが可能となり利便性が向上した。

- ・南区を含めた事務部内の研修会や課内のジョブローテーションの実施

配置している人員の関係上ジョブローテーションは難しかったが、南区を含めた各種研修会を実施し、スキルの向上を図ることができた。

- ・ネットバンキングの利用促進

ネットバンキングによる校納金収納事務（幼稚園）、総合振込・給与振込等（大学・短大・中高）を実施済みであり業務の効率をアップさせることができた。

令和3年度 年度目標

－ 事 務 部 －

庶務課

- ・校舎設備の拡充を図るためにLED化を促進する。
- ・ワークフローの推進
各種申請書や起案書等の利用拡充や、ハンディスキャナー利用による郵便物等受付事務の簡素化を図る。
- ・学生等からスムーズな取次ぎができるよう電話設備の改良（外部発信時の代表番号表示⇒発信部署等の番号表示へ変更）を実施する。

会計課

- ・業務マニュアルの作成・充実を図る。
前年度に引続き、各自の業務の再確認を含め全員でマニュアル作成を推進する。
- ・ネットバンキングの利用促進
大学・短大の校納金収納事務等利用開始に向け準備を進める。